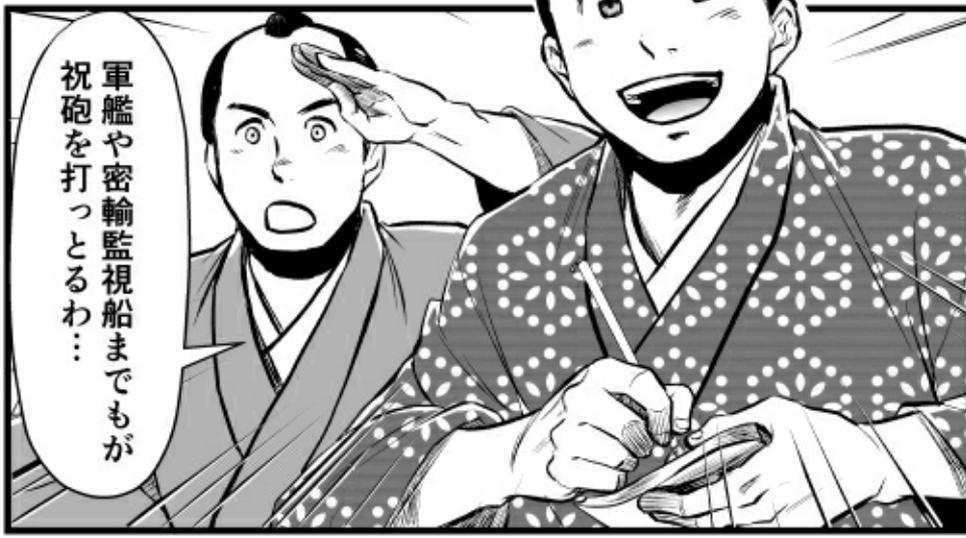




幕末に  
世界一周  
やってみた  
3

構成 川合登志和  
漫画 秋桜



軍艦や密輸監視船までもが  
祝砲を打つとるわ！

遣米使節団を乗せた  
アメリカの軍艦ポーハタン号は  
いよいよアメリカ本土  
午後二時ころサンフランシスコの港に  
入港すると  
港に停泊していた各国の船が  
祝砲で歓迎した



あっ！  
あれは...

ここで一旦ポーハタン号は  
水や石炭の補給のために  
アメリカ海軍造船所のある  
メアアイランドへ移動する



麦畑もあって  
まるで日本の四月頃のような  
風景じゃ

サンフランシスコの街は  
土地に高低差があって  
長崎のようじゃな...





通訳見習のトミーこと  
たていしおのじろう  
立石斧次郎(十七歳)

彼は横浜で税関職員をしていて  
英語は堪能!  
実は福沢諭吉さんがトミーに  
英語の発音を習っていたとか



サンフランシスコの新聞  
デイリー・イヴニング・  
ブルティン紙が大きく報じ  
航行中の出来事や  
日本人の風貌など詳細に報じ  
日本の友好関係を深めたいと  
結んでいる!

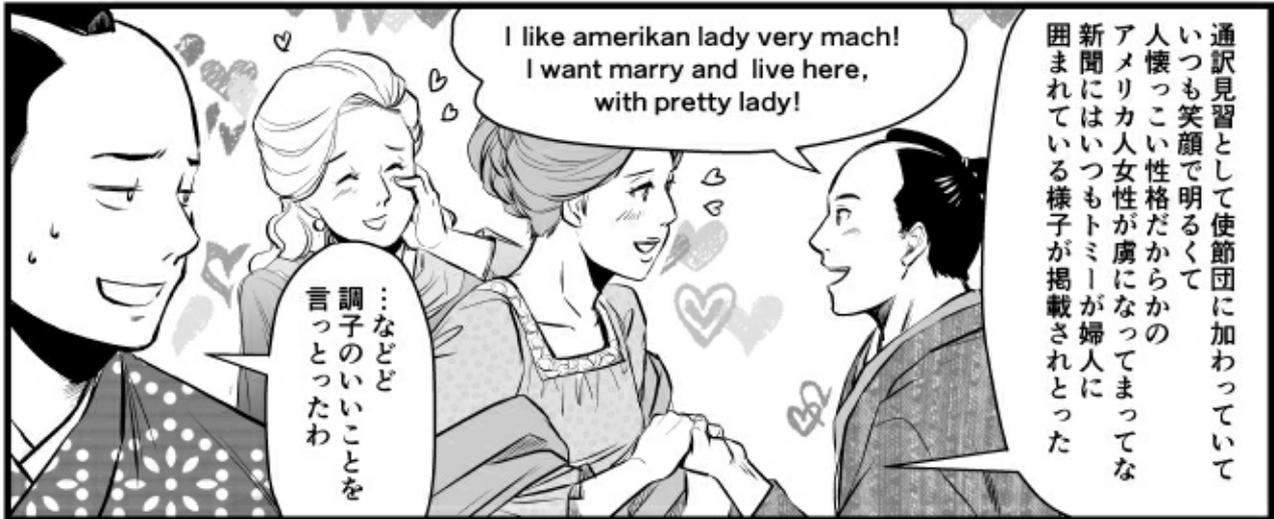
使節団一行の到着は  
サンフランシスコの新聞に  
大々的に取り上げられたんだわ



わしはそんな新聞も  
沢山持ち帰ってきたんじゃが

なかでも  
何度も取り上げられ  
話題になったのが...

キヤ  
キヤ



I like amerikan lady very mach!  
I want marry and live here,  
with pretty lady!

通訳見習として使節団に加わっていて  
いつも笑顔で明るくて  
人懐っこい性格だからかの  
アメリカ人女性が虜になってまってな  
新聞にはいつもトミーが婦人に  
囲まれている様子が掲載されとった

...などど  
調子のいいことを  
言っとったわ



わしはこの歳になって  
ここに来たから  
こうして記録を残せたのよ

いや...



chu

わしももう少し  
若かったら...

ホテルにはトミー宛てのラブレターが  
たくさん届いておったし  
アメリカ人女性とはじめて  
キスをした日本人は  
このトミーと言われとるんじゃ

文政八年十月十七日  
飛驒下原郷十七ヶ村のひとつ  
下原町村！



わしは飛驒五大老のひとり  
加藤三郎右衛門の次男として生まれた



わしの家は今でいうところの村長である  
名主を務めておつてな  
祖父も父も兄もみんな雅号を名乗つておつて  
漢詩・和歌・俳句をたしなむ家だった  
わじの名・素毛も雅号で  
本名は雅英というんじや

わしも幼いころにはすでに  
短文で表現できる能力を身につけたわけよ  
今でいうツイッターをやったようなもんだわ

二十三歳の時わしは高山で  
飛驒郡代・小野朝右衛門高福の公用人となって  
そこで郡代の子・鉄太郎(のちの山岡鉄舟)とともに  
国学と和歌を学んだ



小野郡代は町人や農民に軍事訓練を行ったことで  
幕府からおとがめをうけてな  
その後病死してしまった



鉄太郎も江戸へ引越してしまった  
わしも郡代の公用人をやめ  
九州へ旅立つことにしたんじや

とにかく俳句を詠むという  
吟行の旅じゃった  
二十八歳から三十歳までを  
あてもなく俳句の旅に費やした



実は宿には泊まらんかったんだわ  
お金がもったいないでな  
俳句仲間の紹介で  
泊まっては歩き  
泊まっては歩きの旅だった  
まさにSNSの  
フォローワーの家に泊まる  
バックパッカーのようやら？



そこでたどり着いたのが  
長崎じゃった



だが外国に行くからには  
風景も記録したいと思ひ  
わしは鉄翁和尚に  
絵を習うことにしたんだわ



長崎は魅力的じゃった…

長崎には三か月おつたが  
外国の文化っちゅうものを知ってな  
外国に行きとうて行きとうて  
しようがなかった



わしはいてもたってもいられず  
再び長崎に旅立ったんじゃ



その後  
長崎から故郷に帰ったわしは  
そこである事件を知った

黒船…

ペリー艦隊が浦賀に  
そしてロシアのプチャーチンが長崎に  
来航したというものじゃった



そして九州から帰るとそのまま江戸へ向かい  
山岡鉄舟に会ったり  
外国人に会ったりするうちに

わしはアメリカへの使節団派遣の話  
耳にしたんだわ



岡田さん  
遠い所を…

直井さん  
お世話になります

おや？  
後ろの方は？

一説によれば…  
使節団の物資の調達や  
賄い方を請け負うことになった  
伊勢屋の当主・岡田平作が  
素毛の親戚であり  
商売を手広く営んでいた直井勘右衛門と  
取引のため飛騨にやってきましたこと



さて  
なぜ素毛が使節団の船に  
乗ることができたか…

実はそのいきさつを  
素毛は記録していない



ほう…  
君はなかなか…

素毛の文筆が立つことを見た  
岡田平作が使節団の賄い方として  
推したと言われている

いやいやいや！  
外国に行きたくて  
コネを使ってゴリ押しで  
参加したかと思われると  
炎上しちゃうから  
やめてやめて！



ひもとわた  
日の本へ渡りかけかも本と幾須

この句は  
素毛がサンフランシスコから  
家族に宛てた手紙に載せた句である  
素毛は異国でも風雅の世界を  
詠むことができる  
そんな思いを表現したのである  
素毛のアメリカの旅はまだ  
始まったばかりである



まあとにかく今でいうツイッター(俳句)  
フェイスブック(コネ)  
インスタグラム(スケッチ)の能力を身につけて  
わしはアメリカに旅立ったというわけよ

第4話へ  
つづく

次回予告

